



協立温泉病院広報紙

2013年 5月 30日発行

No.32



〒666-0121
兵庫県川西市平野1-39-1
医療法人協和会 協立温泉病院
広報委員会
TEL. 072-792-1301
FAX. 072-792-2341
URL: <http://www.kyowakai.com/>

新副院長就任

窓を開けると、新緑に照り映えた陽光がキラキラと差し込み、裏山の舎羅林山からは、梢を吹き渡った風がサワサワと初夏の爽やかな薫りを運んできます。

自然豊かな私どもの協立温泉病院は、川西市平野、地図の上ではタツノオトシゴの形をした川西市の「おへそ」の辺りに位置します。当地は、古くから天然鉱泉が湧き出し、平野温泉郷として栄えておりました。由来は平安時代中期(西暦950年頃)、清和源氏の祖として名高い源満仲が鷹狩の折、この辺りの湧き水で傷を癒す鷹の姿を偶然発見したことに始まります。明治期、この鉱泉は理想的な炭酸水として「平野水」の名で広く世に喧伝されるに至り、のちに当地は現在の「三ツ矢サイダー」の創業の地となったのだそうです。

これまでの40年間は泌尿器科学を専門として、手術や放射線、薬物療法などで疾患を治す急性期医療をしておりました。いろいろなご縁で、この4月、歴史と自然につつまれた当院に赴任いたしました。こちらでは療養や介護、リハビリなどケアの医療にたずさわることになります。命を支えるケアの領域では、患者ご本人の希望に沿うことが、ご自身はもちろん周囲の人たちにとって、満足と納得の結果をもたらす重要な要素と言われています。そのためには、家族、医療スタッフ、関係する人たちがご本人の気持ちや希望を冷静に判断推察することが必要となります。今後は、患者さん自身の希望とライフスタイルを尊重したケア医療が提供出来ればと考えています。

当院は、今年8月に創立30周年を迎えます。これまでに積み重ねた数多くの貴重な経験や、長年培われた細やかで機能的なチームワークは、協和会各グループとの連携のもと、この豊能圏域と阪神北圏域の医療介護福祉に大いに貢献できるものと思います。なにとぞよろしくお願いいたします。

副院長 藤岡 秀樹



この度、副院長(内科)を拝命しました山崎です。

当院は昭和58年8月に「リハビリテーション総合病院」として川西市平野に開院しています。私が入職したのは昭和59年12月ですので、まだ、「リハビリ」という言葉自体が目新しい「リハビリ」の夜明けの時代でした。関西一円からスポーツ選手などのリハビリ患者が来院されたのを覚えています。医学の進歩により日本は長寿国となりましたが、一方高齢化や要介護者の増加などでリハビリニーズは増しております。

当院でも、ニーズに応えるべく、平成24年10月に回復期リハビリテーション病棟(2階南病棟38床)を立ち上げました。専任リハビリ医師1名(山崎担当)をはじめ、専従PT2名、専従STを配置し、11月からは365日リハビリが可能な体制を整えました。お蔭様で今年3月までに42名の患者様を在宅や、地域の施設に送り出すことができました。38床の小さな病棟ですが、稼働率90%から99%で、患者様の明るい笑顔や職員の活気であふれています。

私達は、在宅に帰られてからも「自分らしく生きるための様々な活動」を「リハビリ」ととらえ、退院後、外来リハビリでチェックしたり、あるいは在宅調整看護師が訪問したり、訪問リハビリ(当院の療法士がお伺いします)で機能を維持したり、あるいは在宅支援センターの訪問看護に引き継ぐなどして、在宅で安心して生活できるように支援しています。

今後とも、地域に根ざし、回復期から在宅までのあらゆるニーズのリハビリを提供でき信頼される病院を目指しておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

副院長 山崎 直子



今年のフレッシュマンたちです！
よろしくお願いたします。



「協立温泉病院に入職して」

私は昨年の夏休みに協立温泉病院の見学に来たことがありました。病院の雰囲気と人の温かさに心引かれ、第一希望で無事に入職することができました。入職後、新人研修を通して多くの方々と接することで、病院のイメージは益々上昇していきました。日に日にずっと働きたいという気持ちが強まっています。協立温泉病院の一員としての自覚を持ち、明るく元気に頑張っていきたいです。

看護部 大島 由樹絵

「協立温泉病院に入職して」

協立温泉病院に入職してから実際に患者様に関わっていく中で、分からないこと、知らないことが沢山出てきて、自分の知識不足、技術不足を痛感する毎日です。しかし、それと同時に患者様からの笑顔や「ありがとう」の言葉に元気をもらいながら、看護師という仕事にやりがいを感じています。入職したばかりで慣れないことも多いですが、日々学ぶ姿勢を忘れずに頑張っていきたいです。

看護部 吉田 早穂

阪神北脳卒中地域連携研究会について

「困ったままにいませんか？～医療と介護の連携あれこれ～」



阪神北地域では脳卒中の治療とリハビリ、在宅療養生活について宝塚市立病院が中心となり宝塚市、川西市、伊丹市、猪名川町、西宮市などでその役割を担う病院、在宅事業関係者が集まり研究会を開催しています。

年3回行なわれる研修会の1回として、3月28日当院にて上記をテーマに同研究会が開かれ、約80名のご参加を頂きました。

参加職種は医師、看護師、リハビリテーション訓練士、ソーシャルワーカー、事務、訪問看護師、ケアマネージャー、ヘルパーなど多職種におよびます。

脳卒中の患者様は発症後、急性期病院での治療、回復期病院でのリハビリテーション、中間施設の利用やご自宅での生活までに色々な機関や職種の担当者に支援されます。この一連の流れをスムーズにして患者様が問題なく転院、転所するための支

援者同士の働きを「連携」と呼びます。スムーズに支援がされれば問題はないのですがこの「連携」にはいくつかの問題が生じることがあります。原因は機関の機能による違い、職種の違い、保険（医療・介護）による考え方の違いなどです。

今回の研究会はこの連携時に生じる諸問題について多職種によるグループで意見や情報の交換を行ないました。これらを解決して患者様にスムーズな支援が提供できるようにするためには、まず、連携担当者が「顔の見える関係」で相互の立場を理解しなければなりません。今回の研究会では職種、機関の壁を越えて本音を語り合い、少しお互いの事情が理解できました。今後も継続して意見交換を行ない、新しいルールやシステムを構築し、地域での統一を図りたいと考えております。研究会ではこれからも地域の脳卒中患者様のために研究を続けてまいりますので皆様のご協力をよろしくお願いたします。

地域医療福祉相談室 濱田 晴江



「まちの保健室」活動の紹介と参加ご招待

まだまだ聞きなれない言葉？かも知れません。

「一体、何の事ですか？ 何をしているのですか？」と聞かれる事も少なくありません（残念）

今回は、その由来と活動の現状を紹介します。

「まちの保健室」の原点は、18年前の阪神大震災にさかのぼります。復興住宅の独居高齢者の引きこもりや孤独死防止の対策援助として、兵庫県看護協会が中心となって、看護師の地域訪問を開始しました。復興住宅が解消された後も継続希望の「声」が多く上がりました。「学校の保健室」のように、心や身体についての様々な気付きや問題を、誰でも看護職に気軽に相談することができる場と機能として「まちの保健室」として命名され、全国の看護協会でも取り組み、子育て支援から、高齢者の在宅支援、相談など活動は拡大し存続しています。

協立温泉病院看護部では、地域看護委員会中心に、地域住民への健康相談を「まちの保健室」活動に登録しています。

1箇所は、大和地区（牧野台コミュニティー会館）で、年4回（5月・8月・11月・3月）実施します。地域住民の方の意向を取り入れ、限られた時間ですが出来るだけ多くの方が参加できるように、毎回趣向を凝らしています。内容は、身体計測（体組成計、血圧測定）、介護、健康相談です。企画として、「骨粗鬆症予防」の時は、病院管理栄養士も協力参加しました。また、「腰痛予防」の時は、理学療法士による腰痛予防体操の実践指導を行いました。特殊計測機器（血管年齢測定器または骨密度測定器）も導入して、平均60数名の参加を得ました。中には、継続的に参加の方もいらっしゃいます。

2箇所目は、当院玄関前で月1回定期的に開催しています。受診同伴や入院患者の家族様が主にご利用対象です。でも、職員も住民です（笑）。ドンドン参加してください。前回、地域活動に採用の特殊計測機器を、院内でも使用し好評を得ましたので、本年度も引き続き企画しています。

協立温泉病院「まちの保健室」活動が、院内、地域に根付き、皆様の健康増進に役立てる事を期待し、今後も活動を続けます。皆様のご参加をお待ちしています。

看護部 地域看護委員会 池田 輝美



当院玄関前にて